

<はじめに>

吉備の海部の分布に不思議なことがわかってきた。吉備の海部のうち備前地域、なかでも邑久郡に分布する海部と備中の海部、それに吉備海部直が並立する存在であることだ。

筆者は吉備の海部は、応神天皇や仁徳天皇が吉備に来られた時は足守地区にいて、その後、倉敷市の北部（生坂）に移動し、さらに南部（羽島）方面に移り、徐々に邑久郡に拠点を移していたとの仮説を立てて論考を進めてきた。ところが、邑久郡内の古墳と記紀に登場する吉備海部直との関連性が見つけられなかった。仮説は白紙に戻すべきと感じている。したがって、今回は謙虚にその反省の上に立って、熊本方面の古墳と吉備の古墳の類似性を考えてみる。そのうえで吉備の血脈を受け継ぐ九州の2豪族および、各地の海部との関連、なぜ巨大な古墳をつくれたのか？ 造山古墳のなぞにふれたい。

。

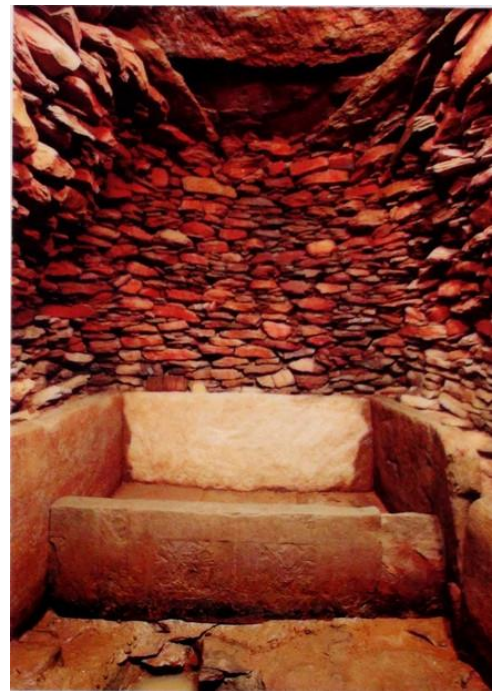
<1> 相似形石室を持つ古墳

熊本県の宇土半島に千足古墳の石室とよりふたつの石室を持つ古墳がある。なぜだろう？ やはり海の民でつながっていると考えるべきだろう。

◎千足古墳とヤンボン塚古墳

「吉備の巨大古墳—造山古墳群—」の著作で、同古墳群の発掘に携わる西田和浩氏は市民講座の資料「千足古墳と初期横穴式石室」（註1）の中で千足古墳の特色について次のように述べる。

「千足古墳の墳頂部には2つの埋葬施設（第1石室・第2石室）が存在する。第1石室は直弧文装飾をもつ横穴式石室であり、第2石室は内部の発掘は行われていないものの、第1石室と同じく横穴式石室と考えられる。第1石室は5世紀前半に築造され、吉備最古級の横穴式



千足古墳内部。手前の石障害に直弧文が刻まれている

石室である。」(同資料1 ページ)

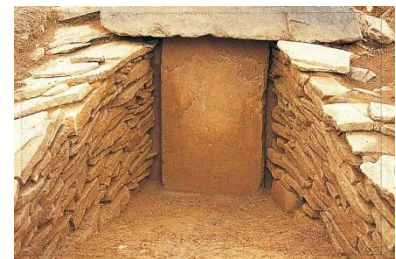
まずどれくらい似ているか見てみよう。ヤンボシ塚古墳(註2)は熊本県の宇土市上^{おうだ}網田にある円墳で、今夏(令和5年8月)訪れてみた。網田川の扇状地に連なる小高い丘の上にある。その扇状地の向こうには内海が広がっている。現在、墳丘の確認はできるが、発掘調査時に現れた羨道も埋められ何もわからない。次ページの両古墳の比較図を見ればまさに相似形といえる。

西田氏によると「第1石室は、肥後型石室の特徴である石障をもち、死床を直弧文で彫刻した仕切石で区切る。構造が不明であった羨道部の発掘も2011年に行われ、埋葬施設の全体像がわかる貴重な初期横穴式石室である。石室の特徴として、『石障』・『玄門(入口)の立柱石』と『板石閉塞』・『隅角を消すように穹^{きゅうりゅう}窿(ドーム)状に積まれた壁面』が挙げられる。玄門部の石障にU字形の割りこみがみられる。このU字形割りこみは、肥後のヤンボシ塚古墳や

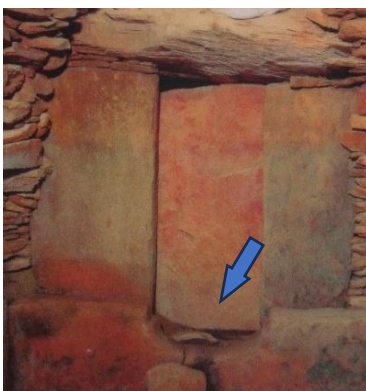
井寺古墳など地元熊本の石室にみられる特徴である。天井部は3枚の板石を用い完全なドーム状にならず、石室の平面形が長方形になるなど北部九州型石室の要素が含まれることから、『筑肥型』に分類される場合がある。石材は、壁面に香川産の安山岩を用い、石障に天草砂岩を用いる。」(同p1)

に天草砂岩を用いる。」(同p1)

この「U字形の割り」とは玄室の入り口の石障にU字形の割りこみを入れる技法で、右上㊤と左の写真の下部、また、次ページの千足古墳、ヤンボシ塚古墳のそれぞれの左図の矢印を付けた部分のことをいう。同氏は各地の初期横穴式石室を比較し、次のように結論付けている。「千足古墳以外の初期横穴式石室を持つ古墳として、九州では釜塚古墳、ヤンボシ塚古墳を挙げる。本州では、向山1号墳(福井県)、おじよか古墳(三重県)などを挙げる。それらと比較すると、千足古墳の石室が肥後型石室の特徴を強く示していることがわかる。」(同)。

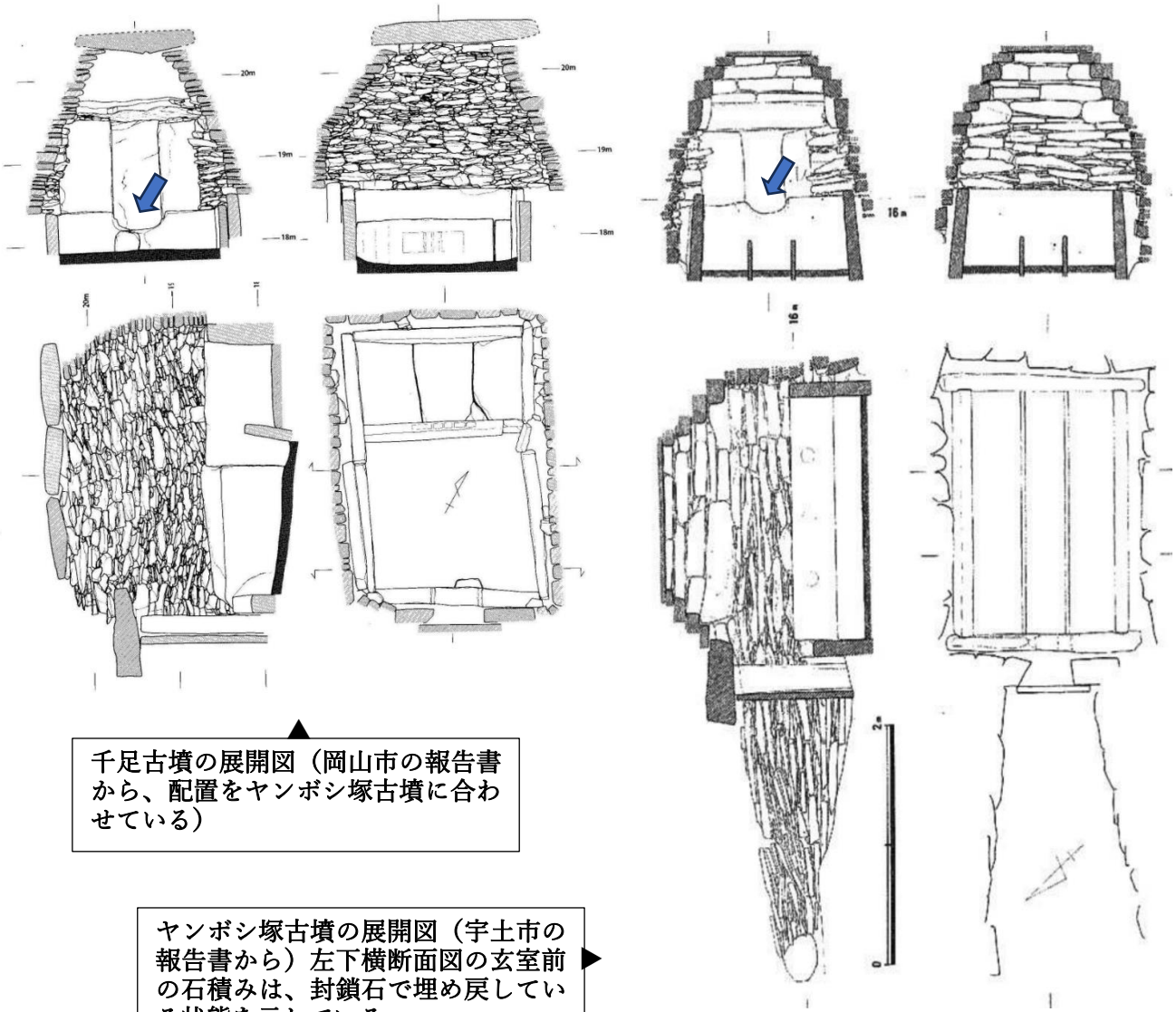


㊤はヤンボシ塚古墳の外観(右の高まり)㊤は玄室内部㊤は玄室入口で羨道部分



整備前の千足古墳内部から玄門の方向を撮影した貴重な写真

千足古墳とヤンボシ塚古墳の石室比較図



千足古墳の展開図（岡山市の報告書から、配置をヤンボシ塚古墳に合わせている）

ヤンボシ塚古墳の展開図（宇土市の報告書から）左下横断面図の玄室前の石積みは、封鎖石で埋め戻している状態を示している

千足古墳とヤンボシ塚古墳の比較表

	石室幅	石室奥行	石室高さ	墳丘全長	特徴
千足古墳	1.8 m	2.9 m	2.5m	80m (前方故円墳)	石障とU字 削りこみ
ヤンボシ塚古墳	2.0m	1.35m	1.8m (想定※)	25m (円墳)	石障とU字 削りこみ

※「八代海周辺の装飾古墳－発生と展開-」（2020熊本県文化財調査報告第337集）p 69による。千足古墳は岡山市市教委の報告書。

初期横穴式石室諸要素の比較

	石 障	玄 門 立柱石	板石 閉塞	隅角部壁面の石積 (持ち送りの傾向)	装 飾	石 材
千足古墳 (岡山県 岡山市)	有 (割り 込み有)	有	有	ドーム状志向	有 直弧文他	天草砂岩・安山
ヤンボシ塚 (熊本 県宇土市)	有 (割り 込み有)	有	有	ドーム状志向	有	円文・船 阿蘇凝灰 岩 天草砂岩
釜塚古墳 (福岡県 糸島市)	無	有	?	直角的	無	地元の石材か
向山1号墳 (福井 県若狭町)	なし	有	有	ドーム状志向	無	地元の石材か
おじよか古墳 (三 重県志摩市)	有	有	有	直角的?	無	* 埴製枕に直弧文 地元の石材か

※西田和浩氏の「千足古墳と初期横穴式石室」(p7から)

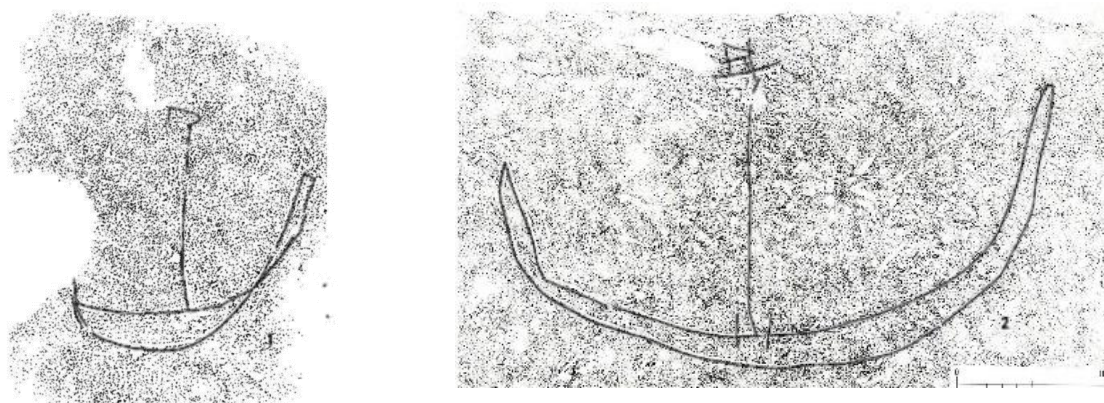
以上のことを集約すると、千足古墳とヤンボシ塚古墳は、工人グループが同じなど何らかの関係があるのだろう。

◎ヤンボシ塚も海の民？

ヤンボシ塚古墳の案内看板には「石室内側にめぐらされた左右の石障には円文が彫りくぼめられており、他に船も描かれています」とある。宇土市教育員会報告書「ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳」には下図のような石障に円の模様と船の壁画3つが掲載されている。

また、周辺古墳でも梅崎古墳や仮又古墳では大型船の線刻壁画が見つまっている。

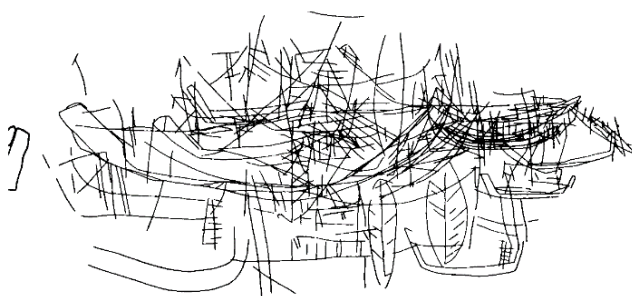
。



ヤンボシ塚古墳の船の石障ふたつ。これ以外に円模様の石障がある。
(この図は石障の拓画の上に、線で復元されたイラストを重ね合わせた)



梅崎古墳の大型の船を描いた線刻画



飯又古墳の大型の船を描いた線刻画

これらの古墳の被葬者が海の民であることは明らかだろう。特に周辺古墳のものは、大型船で朝鮮半島との交流にも使えただろう。

日本書紀に登場する吉備の海部直（黒日売の父親＝筆者は造山古墳の被葬者と主張）の次世代に当たるとされる吉備直の赤尾は、雄略帝の命で朝鮮半島に渡り、田狭の子・弟君とともに新羅を屈服させる大役があった。ところが弟君が、田狭とともに裏切ったことで、弟君の妻の樟媛が国を思う心が強く夫を殺害、樟姫とともに百済の奉った才伎^{てひと}を連れ帰り復命できたとされる。

◎年代が一致する千足とヤンボシ塚

2つの古墳の築造年代について、ヤンボシ塚古墳の発掘者の高木恭二氏（宇土市教育員会）は石室の形式などから「ヤンボシ古墳は長砂連古墳や千足古墳と同じ5世紀前半」とみている。

これについて筆者もこのドーム形の横穴式室は肥後で生まれたであろうとみおり、筑紫を含めた横穴式古墳は、九州で普及し全国レベルまで普及したといえる。そのもっとも先駆けとなるのが、福岡県の老司古墳で、5世紀のごく初期であり、仁徳天皇のお妃黒日売命の父親・吉備海部直の活躍年代と矛盾はないと考えている。

<2> 直弧文のルーツは吉備か

前項であえて触れてなかった直弧文の文様について考える。二つの古墳のうち千足古墳に直弧文の石障（下図、註5）があることはよく知られている。

吉備には古くは弥生時代最後の楯築遺跡の弧帯紋石、それに続き、古墳時代前期まで続く特殊器台に施



弧帯紋の施された楯築遺跡の亀石

されたのが、直(ちよく)弧(こ)文(もん)と巴形渦巻透かし文様である。しかし、吉備、肥後ともに、そのルーツは謎に包まれたままである。

吉備の特殊器台は弥生時代終末期の立坂・楯築（Ⅰ型）から向木見（Ⅱ型）を経て大宮（Ⅲ型）へと発展し、初期古墳（吉備中山茶臼山古墳など）まで使われており、この時期からは大和の古墳の方が主流となって、必ずしも連続性がないわけではない。

この点について、「直弧文」（註7）の執筆者の伊藤玄三氏は「直弧文における最古の形態は、現在のところでは吉備方面の墳丘墓出土の特殊器台、楯築弧帯石、さらに近畿地方の古墳出土の特殊器台、纏向の弧文円板などの文様ではないかと考えられる。」（同書 p 78）とし、大和の埴輪（特殊器台型埴輪含む）が、肥後形石障直弧文に先行していたとの趣旨を述べている。

現段階では古代肥後系の直弧文のルーツが吉備とは即断できない。すなわち吉備の特殊器台は埴輪のルーツであっても、纏向の弧文円板を経て肥後の装飾古墳直弧文へ流れ込んだかについては保留しておく。

肥後の直弧文はルーツを朝鮮半島に求める議論もあるが、これは半島国家独特の虚偽主張にすぎないだろう。直弧文付き鹿角製刀剣の分布は大和中心で、朝鮮半島での出土は極めて少ないことでもその説は成り立たない。直弧文のルーツ問題は、いずれ論ずることになる「特殊器台の問題」で取り上げることとする。



大宮型（Ⅲ期）の特殊器台

◎吉備では肥後系石室古墳は限定的か

これまで千足古墳は吉備での唯一の装飾古墳といわれてきた。線刻のある古墳が若干は確認されているが、本格的なものとしては確かにそういってもよいのだろう。それに直弧文のルーツである吉備との説もあるのにである。

ただ、同古墳の第2石室は発掘されていないが、第1石室と同様とみられ、その存在の可能性は高い。また造山古墳群の第6号古墳は「直径30mの円墳で千足古墳とおなじような石室？」（「造山古墳のなぞ？」＝岡山市刊行のパンフレット＝から）という。

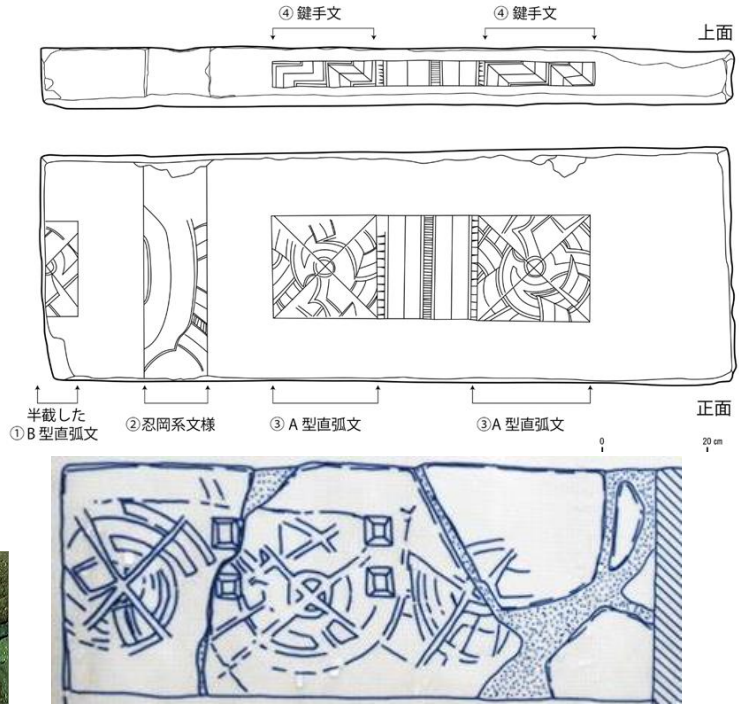
将来のことはわからないが、肥後系横穴式石室は、吉備では限定的といえるのだろう。

このことは、吉備の海部直は娘が仁徳天皇のお妃になることで、海部としての横の連携の中で優位に立ち、肥後の海部との交流を深め、おそらく肥後の女性を妻に迎えていたで

あろうか。それは第2石室の被葬者かもしれない。

◎天草砂岩の石障

肥後の横式石室では直弧文の石障を作る場合、最も多いのが天草砂岩だった。彫りこみ方法には、直弧文を浮彫したものと、直弧文を線刻したものとがある。もちろん千足古墳は浮彫したものだ。この長砂連古墳も同様で、その形式が一致していたことでも注目されてきた。



上は千足古墳の直弧文。その下は長砂蓮古墳そばに立つ案内板に描かれているスケッチ画。左は天草砂岩に掘られた直弧文の実物。2つの石障模様はまったく同じといえそう

◎馬門石でもつながる


造山古墳の前方部（神社横）に宇土半島産の馬門石製の石棺がおかれている。この石棺は、「今は消滅した新庄車塚？古墳から出土したものを村人が引き上げた」という伝承と、「もともとからこの古墳にあった」という伝承があってはっきりしない。

この石棺ははるばる肥後の宇土半島から運ばれたことは間違いない。採石地は宇土市網津町・網引町にあり、馬門石（阿蘇溶結凝灰岩）といわれる。



阿蘇の凝灰岩で作られた石棺④とその蓋⑤

ピンク色を呈しているものをピンク石というが、すべてがピンク石ではない。灰黒色とピンク色の馬門石が主要な色調であり、一部にベージュ色やオレンジ色の露頭も存在する。

この石棺には直弧文がうっすらと残っているとされ、その文様と近いとされるのが、鴨籠古墳（熊本県宇城市不知火町長崎）だ。実際の石棺は熊本県立美術館で展示されている。ただ、長さ約1.64メートル、幅約0.66メートルで、「石の厚みが10センチほどで、底の長さが140cmほどか。石枕を頭にする、120cmの身長がギリギリ」（ひもろぎ逍遥 = <https://lunabura.exblog.jp/30429685/>)。子供用の石棺といえよう。内側は、赤色顔料で赤く彩色されており、遺体の頭部が安置される位置は、枕になるよう一段高く加工されているとのことで、形状は確かに造山古墳の石棺と近いようだ。

◎岡山県内には3古墳



吉備には馬門石を使った古墳は、瀬戸内市の築山古墳、赤磐市の小山古墳がある。



築山古墳石棺④と小山古墳御破壊された石棺

築山は前方部が非常に発達した前方後円墳で、全長、後円墳長、前方部幅の比率から

求めることが難しい。出土物からは5世紀後半という。小山古墳は5世紀末から6世紀初めの古墳とされている

◎現地で見た馬門石

ヤンボシ塚古墳を訪ねた際、採石地を訪ねることができた。現地での情報によると阿蘇

コラム 2005年8月26日、7トンもの巨大な棺を載せたいかだ舟を曳く古代船・海王が大阪南港に入ってきた。



実に宇土半島のマリナを出港して23日目だった。漕ぎ手は、あの邪馬台国への航路をたどった野生号のメンバーたちも混じっている

大王の棺など復元 860キロを 実験航海



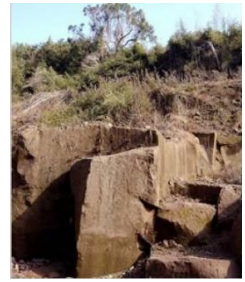
た。1500年の前、継体大王の真の陵墓・今城塚古墳の棺を宇土産の阿蘇のピンク石が使われたことがわかり、一体どうやって運んだのかを解明したいと、考古学者、造船関係者らが集まった。



実際に石を切り出し、巨大な修羅を再現、手探りで筏や船を建造、漕手を集め大型曳舟を専門家らとともに作りあげてきた。そのゴールの日だったのだ。

海路は860キロ、寄港地は21港にもものぼっている。千足古墳などのある吉備では、鞆、玉島、牛窓の3港が寄港地になった。選定には馬門石が使われた古墳があることなどのかかわりがあること重視したという。

凝結凝灰岩は灰黒色と「ピンク色の馬門石が主要な色調であり、一部にベージュ色やオレンジ色の露頭も存在する」（註 10 という。）また、現在も採石が続いている。かつての採石場へはとても細い道しかなく、たまたま軽トラックをレンタルしていたおかげで、石切り場跡を確認できた。おまけだが古代^{うまや}馬家^{うまや}で使う馬などを飼育していた「牧」



（律令時代の牛馬の放牧場）の守り神を祀る牧神社（文化4年再建）も訪れることができた。

<3> 血でつながる吉備と九州

◎九州に吉備のふたりの国造

吉備と肥後のつながりを古墳やその石室、石棺で共通性を探ってきたが、今一つ人脈的にはとらえきれてなかった。しかし、先代旧事本紀の国造本記には、「吉備一族が九州の国造になったケース」が二つ記されている。

その一つは【国東の国造】、もう一つは【葦北の国造】である。「先代旧事本紀〔現代語訳〕」（志村裕子訳、安本美典監修）から引用してみよう。（註 11）

【国前の国造】*130

「志賀高穴穂朝の御代に、吉備臣と同じ先祖(第七代孝靈天皇の皇子大吉備津日子の命、若日子建 吉備津日子の命)の六世の孫、午佐自の命を国造に定められた(国前国は豊後国国埼郡、今の大分県国東半島付近)。」

この注釈(*130)に

「国前の国造 伊予灘、別府湾を見下ろす築杵市美濃崎に県下最大級の前方後円墳の御塔山(おとうやま)古墳、小熊山古墳がある。吉備地方と関連する出土品が見られる。」

【葦分の国造】*136

「纏向日代朝の御代に、吉備津彦の命(孝靈天皇皇子)の御子、三井根子の命を国造に定められた(葦分国は肥後国葦北郡、熊本県南部宇城市・水俣市・八代市付近)。」

この注釈(*136)に

「葦分の国造宇城市(字土半島)の鴨籠古墳は国造関係者の墓とされる。『万』巻三・二四六『葦北の野坂 あしきたの浦ゆ船出して水島に行かむ』と、『景行紀』の伝説地を詠っている。」

< 4 > 最古級の天神山古墳

◎古墳から見てみる

吉備と肥後、さらに国東の古墳を古墳の全長、前方部幅、円墳の直径から築造年代を推定する方法でこの3地域の古墳の築造年代を分析してみようと試みたが、大分県の注目古墳についてはデータ不足だった。そこで、熊本県中南部をまず分析してみた。

対象とした古墳は下記の表の通りだ。

熊本県中南部の主要な大型前方後円墳一覧

古墳名	前方部幅	後円部径	墳丘全長	所在地	参考事項
八代大塚古墳	49.0	28.0	55.7	八代市	
国越古墳	22.5	36.2	62.5	宇城市	
高取上の山古墳	43.1	48.2	77.0	氷川町	
天神山古墳	46.0	61.0	107.0	宇土市	
中ノ城古墳	67.5	57.5	98.0	氷川町	野津古墳群
端ノ城古墳	42.0	40.0	68.0	氷川町	野津古墳群
姫ノ城古墳	50.0	37.0	86.0	氷川町	野津古墳群
物見櫓古墳	30.0	35.0	62.0	氷川町	野津古墳群
向野田古墳	35	55.0	89.0	宇土市	
大野窟古墳	不明	39?	123	氷川町	円墳とされていたが、墳長約123mの前方後円墳と判明

(参考文献は「日本古墳大辞典」とその続編、およびINの古墳マップ)

この表に吉備と大和の古墳を比較のために年代推定の分布グラフにし、次ページに掲載した。

◎築造期が合わない

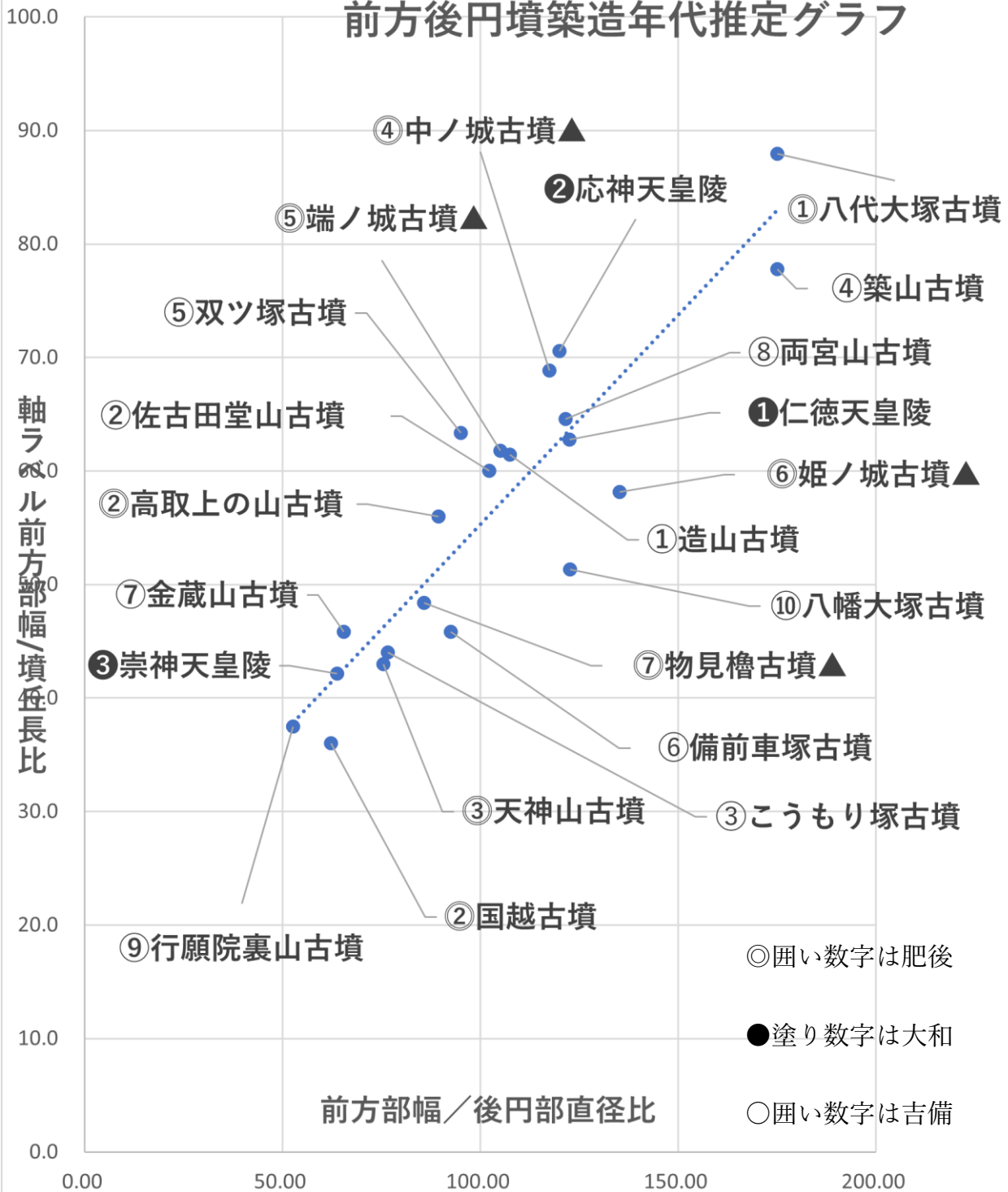
次ページの表からはいまひとつ明確ではないが、野津古墳群には、年代ごとに並ぶ前方後円墳が並ぶ。

最初の国造・三井根子命が任命されたのは景行天皇(370-386 ごろ=安本編年)の時だ。吉備では日本武尊の東北遠征に副将として随行した吉備武彦の時代だ。その墓が備前車塚古墳と安本氏も筆者も判断している。散布図でそのすぐそばに「物見櫓古墳」がある。

これで決まりかということ、とんでもないことなのである。考古学者の年代設定は6世紀なのである。このプログラムにしる、データを扱うものは、元データが不正確だと、とん

熊本県南部と吉備の

前方後円墳築造年代推定グラフ



でもない結果が出る（筆者はそのリスクを知らながらあえて挑戦している）。古墳の場合、自然崩壊や人工的な改変などがそれである。それに筆者も現地を見てないことも自信がない一因だ。

考古学者の判断は出土遺物を参考にしているので無下に否定できないと思っている。

氷川町のホームページでの説明では「氷川流域は県内でも有数の後期古墳が集中している地域で、当古墳群は火の君一族の墳墓と考えられています。特に墳長 100m 前後の古墳が密集している例は少なく、かなりの優位性・特異性を示していると言えます。また、垂飾付耳飾・陶質土器の出土から、朝鮮半島との関わりが推定されています。■墳形：前方後円墳 ■時期：6 世紀前半～中頃」と記されている。

(URL <https://www.town.hikawa.kumamoto.jp/kanko/kiji0033765/index.html>)

これらのことや横穴式石室からもこの物見櫓古墳を 4 世紀古墳にすることは無理がある。吉備武彦の古墳とのグラフ上の近さは、古墳の崩壊によるものと考えるべきだろう。ただの偶然である。不思議な現象なので紹介した。

◎旧八代郡内もさぐる

現在の葦北郡（葦北町と津奈木町）にはめぼしい前方後円墳は見当たらないが、前出の国造本記注釈に「鴨籠古墳（宇城市）の被葬者を国造関係者の墓」とするとの記述がある以上、旧八代郡地域にも求めるべきだろう。なかでも葦北郡であった八代市南部の日奈久村、二見村、百済来村は注目すべきだが、前方後円墳の情報が乏しい。

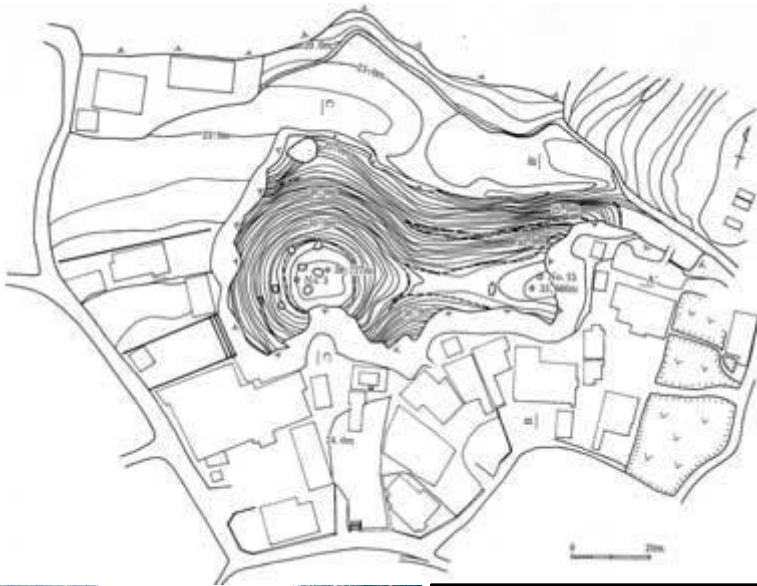
そのような状況の中で、八代平野で最大の古墳墳長を持つという「高取上の山古墳」に注目してみた。全長 77m だ。プロット位置も吉備武彦とそれほど離れていない。ただ、この古墳からも須恵器が出ており、三井根子命にあてはめるわけにはいかない。

同じ古墳群に属する①大塚古墳のプロット位置はグラフを外れかけている。これは八代市ホームページによると「墳丘（ふんきゅう）の一部が削られています、現状で全長 55.7m、後円部径 28m、前方部幅 43.1m、後円部高 8.9m を測ります。（略）調査で、人物埴輪（はにわ）や円筒埴輪、須恵器等が出土しました」とある。

周辺にあるいくつかの古墳とともに古墳群を形成しているが、国造クラスの墳墓ではないだろう。

◎大きさ形からは天神山

宇土市にある「天神山古墳」はプロット位置が吉備武彦の父親・御鉏友耳建日子と推定している⑦金蔵山古墳（岡山市）に近く、吉備武彦の⑥備前車塚古墳にも近くその中間に位置する。



上は天神社古墳の線画。
前方部の崩壊の激しさが
わかる。左は天神社の裏
山にある同古墳前方部崩
壊の応急処置でブルーシ
ートがかけられているの
がわかる

人頭大の自然礫（しぜんれき）や角礫（かくれき）がみられることから、葺石を有していると考えられます。埴輪の存在は確認されていません。」とある。

葦北の国造の後裔には百済の將軍に上り詰めた「日羅」やその父・葦北（現在の葦北郡と八代市）国造

刑部^{ゆげいべのありしと}阿利斯登がいる。代々奥津城を守ってきたはずである。初代だけ特別だったのだろうか？ 疑問も多い。今回取り上げた古墳群にそれが潜んでいる可能性を信じてよいようにも思う。まだ、解明はほど遠いだろうが、古典文献を信じることから始まるに違いない。（ <https://www.city.uto.lg.jp/museum/article/view/45/335.html> ）

◎本当にいたか午佐自命

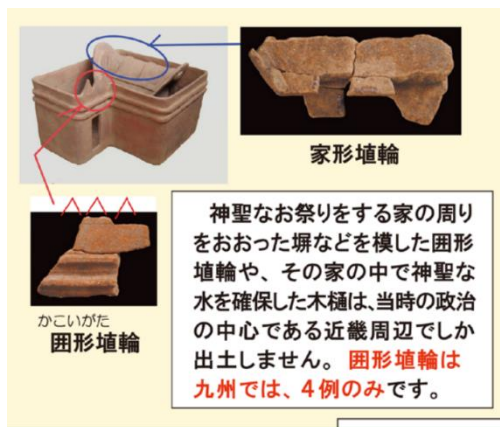
国東の御塔山古墳と小熊山古墳のうち^{おとうやま}小熊山古墳は前方後円墳だが、前方部の幅は何処にも記されていなかった。御塔山古墳は円墳か、造り出しがついていて帆立貝型古墳のようだ。被葬者は家族や主従関係かもしれない。

国造本紀の注釈 130 にある「吉備地方と関連する出土品が見られる」と指摘がある。杵築市のホームページに「史跡紹介パンフレット小熊山古墳、御塔山古墳」のタイトルで興

味深い写真や画像が掲載されていた。

(<https://www.city.kitsuki.lg.jp/material/files/group/29/kogumayamakohunotouyamakohunpanhuretto.pdf>)

確かにそこに掲載されている「冪型埴輪」「木樋形埴輪」は吉備の古墳でしか出土例がないようである。まず実例を見てみよう。



◆上右が吉備の古墳（金蔵山）から出土した家形の冪込み形象埴輪。◆左上が御塔山の出土破片が、吉備のものと同じ埴輪の一部と判明してわかりやすく表現しているもの。

◆左は木樋を土で作った土製品。◆それに対して吉備で出

土した家形埴輪（展示パネルの上右）では、その模型の家の床面に水施設を焼き物で表現している。どちらも、古墳時代には水が祭祀で重要な要素であることを示している。

岡山市シティーミュージアムで12月1日から2月12日まで開催の「吉備の大古墳展」で関連写真が示されている。それを活用させていただいた。謝意を表したい。

このような希少な形象埴輪が、吉備と国東で出土したことは、国造本紀が当時の人々の交流をいかに正確に伝えているかを証明している。

午佐自命を菟名手命に当てはめるのもよいが、吉備の午佐自命という名前の方がいたかもしれない。どちらにして



も、吉備津彦命の血をひく人物が、志賀高穴穗朝（成務朝＝368～390 ごろ＝安本編年）の御代に国造として国東へやってきたのだ。それが事実だ。

◎葦北の英雄日羅



日羅は三井根子命の血を受け継ぐと同時に吉備の海部羽島とかかわりが深い。

今夏、熊本県八代市坂本町百済来の百済来地蔵堂（註4）をたずねた。奥深い山里そのものだった。その地蔵堂の敷地の一角に日羅が埋葬された場所があった。墓というより茂みに囲いを付けただけな

日羅の遺体は小郡の西畔丘に埋葬され、後に葦北のこの地に移葬されたと伝わる

のだ。

まず、日本書記などから要約してみる。

「敏達天皇 12 年 7 月（583 年）、天皇が任那を再考するため、火葦北国^{ひあしきたくにのみやつこあとししと}造阿利斯登の子で、百済の^{だちそつ}達率^{にちら}である日羅が賢人で勇気がある人物なので、相談相手として迎え入れたいと、紀国^{きのくにのみやつこおしかつ}造押勝と吉備海部直羽嶋とを遣わした。1 回目は失敗したが、再度羽嶋が百済に派遣され、羽嶋の機転もあって成功した。

日羅と羽嶋は吉備の児島屯倉に辿り着き、難波の館（迎賓館）に入った。大和朝廷に招かれた日羅は、朝鮮半島に対する政策について朝廷に奏上した。その内容が人民を安んじ富ましめ国力を充実したうえで船を連ねて威を示せば百済は帰服するであろうことや、百済が九州に領土拡大を謀っているので防御を固め欺かれぬようにすべきこと等の百済に不利な内容であったため、同年 1 2 月に百済国役人の^{とくに}徳爾と余奴らによって難波で暗殺された。物部^{もののべの}贄子と^{おおともの}大伴糠手子により小郡の西畔丘（大阪か）に埋葬され、後に葦北に移葬された、という。



◎羽嶋の眠る海部の古墳か

その日羅とかかわった羽嶋の墓の可能性のある古墳が見つかったのだ。

八幡大塚古墳の古い航空写真の痕跡をもとに前方後円墳の想定図が描かれている

令和5年11月29日付けの山陽新聞26頁に「岡山にあった八幡大塚古墳 64メートルの前方後円墳 6世紀後半 大きさを吉備屈指」の見出しが躍った。記事中には被葬者について「瀬戸内を拠点に、王権と密接なつながりを持ちながら外交などで活躍した一族、吉備海部を率いた人物では」と記している。

筆者はかつて児島半島で金環が出た古墳（円墳）が話題になったことを覚えている。あの古墳は何処だろうと思っていた。それがこの吉備の海部について執筆中に突然報道されたのだ。早速、開催中のテーマ展「八幡大塚古墳と児島屯倉」（12月8日～来年1月14日まで）を岡山県立博物館へ見に行ってきた。同古墳は開発で完全に消えているが、現場も見えてきた。今回の発表は同博物館員が古い航空写真などを集め研究、墳形なども復元している。

早速、この写真から全長64メートルを基準に後円部径と前方部幅を割り出し、散布図に入力してみたが思うような結果は出なかった。なぜだろう？ 6世紀後半は前方部が長い、との指摘が記事中にもあった。今回の熊本の古墳も含めて6世紀古墳にはこの散布図による年代測定は万能ではないのかもしれないと疑問を持っているところだ。もう少し事例を増やして検討したい。

吉備の海部の実態に近づけた気がした。今回の3回にわたっての論考は「造山古墳＝黒日売説」を補強できただろうか？ 巨大な前方後円墳を築く財力は、海外へ雄飛した海部だからこそできたのか？ 大和朝廷の丸抱えなのか？ まだ答えは出せない。

<おわりに>

全国4番目の規模を誇る「造山古墳の被葬者が吉備の海部直の娘・黒日売命である」ことを語り続けてきた。どこまで伝わったのか？ 横道に入り込んだこともある。

吉備の海部について、時代とともに牛窓方面に収斂するとの仮説を捨てた。現実には合わない面もあった。「日本古代氏族人名辞典」（坂本太郎、平野邦雄 監修）の海部の項に「海部諸氏の統一的出自伝承は成立していない」とし、各地の海部の羅列する中で吉備の所には「吉備(吉備海部直)、備前(海部直)、備中(海部首)3つが並列で記載されているのだ。吉備の海部は3グループあるのだ。牛窓の古墳を吉備海部で説明できなかった。ということは、このシリーズ<上>では吉備の海部直のルーツを彦狭嶋に求めていたが、<中>では神魂命（神祝命）とするなど混乱が続いた。3つの海部はそれぞれ違う先祖を持っていると理解した方が、つじつまが合うことが判明した。この部分を今回から修正したつもりだ。

また、「造山古墳」の発掘調査が今年からいよいよ主体部に入るとしたが、担当者に尋ねたところ、まだ何の計画もできてない。いますぐできるほどの知見は持ち併せてない」という返事だった。筆者の勇み足なので訂正させていただく。 (了)

< 註釈一覧 >

(註1) 西田和浩氏 愛媛県宇和島市に生まれる。岡山大学大学院文学研究科修士課程修了 岡山市教育員会文化財課。平成 28 年度 岡山市埋蔵文化財センター講座 (2017 年 1 月 21 日) インターネットのアドレスは次の通り。

<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000005/5348/000284235.pdf>

(註2) ヤンボシ塚現地案内板

この古墳の全容がわかる内容なので収録した。

ヤンボシ塚古墳の現地案内板

所在地 宇土市上綱田町字小宗

指定区分 宇土市指定史跡

指定年月日 昭和六三(一九八八)年九月六日

●遺跡発見・調査の経緯

昭和五一(一九七八)年には古墳であることが確認されていました。昭和六〇(一九八五)年にミカン園造成の計画がおこり、同年二月から三月にかけて宇土市教育委員会が主体となって発掘調査を行いました。調査の結果、貴重な古墳であることがわかり地権者の方のご厚意で古墳は保存されることになりました。昭和六三(一九八八)年九月六日付けで市の史跡に指定されています。

●概要

古墳の立地する場所は、宇土半島の山塊から西側に波生する丘陵の先端部であり、標高一七m付近に位置します。調査着手時には既に古墳の一部は削平を受けて、若干の地形変化がありましたが、古墳の中心付近の石室中央部の大半は残っており、特に右室入口部分はほとんど手つかずで最終埋葬時の状態を保っていました。墳丘は直径二〇mの円墳で、周囲に幅二、三mの周溝がめぐっています。

●遺跡の特色と意義

古墳の主体部は、石障系横穴式石室とよばれる特

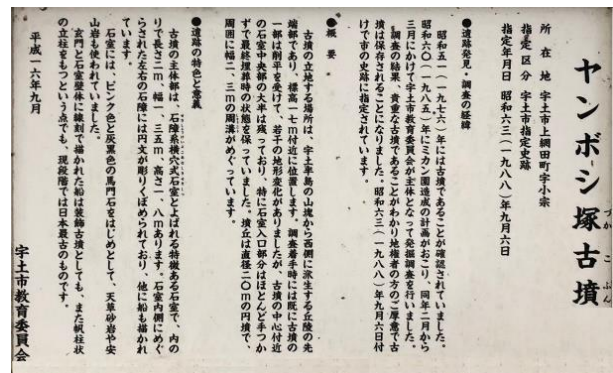
徴ある石室で、内のりで長さ二 m、幅一・三五 m、高さ一・八 m あります。石室内側にめぐらされた左右の石障には円文が彫りくぼめられており、他に船も描かれています。

石室には、ピンク色と灰黒色の馬門右をはじめとして、天草砂岩や安山岩も使われていました。

玄門と石室壁体に線刻描かれた船は装飾古墳としても、また、帆柱状の立柱をもっといふ点でも、現段階では日本最古のものです。

平成一六年九月 0000

宇土市教育員会



(註3) 宝賀氏の「国前臣の祖・菟名手説」

九州北部、豊後の国東半島にあった国前国造の系譜は、奇妙な点が多い。角鹿国造の系図にも、祖の建功狭日命の兄弟に菟名手命をあげて、国前国造の祖と記されるものの「国造本紀」では吉備 都命の六世が午佐自命)、その後の歴代の流れが不明である。中田憲信編の『皇胤志』には、後世の偽作とも思われる奇妙な名前が歴代が続くから、この辺は信頼できない。この国造の本来の系譜は 宇佐国造あたりの九州の古族の流れではないかとも思われるところもあり、中世には族裔とみられる諸氏では多く紀姓を称した。先祖の名前は、景行紀十二年九月条に「国前臣の祖・菟名手」と見え、この者は『豊後国

風土記』逸文では豊前北部の豊国造の祖ともされるが、「国造本紀」には、豊国造条に成務朝に置かれ、伊弉国造と同祖の宇那足尼が定められたとあって、吉備氏の系とは整合しない。以上の諸事情から、菟名手関係者が吉備一族の出と伝えるものの、当否は留保しておきたい。鴨別が神功皇后の遠征に随行して熊襲を討ったという伝承が『書紀』に見え、九州では阿蘇あたりを中心に笠氏を名乗る一派が見える。その系譜には不明な点が多く、九州の笠氏は、吉備とは別系の笠氏ではないかとしておく。そうしたものは次のようなものか。①肥後の阿蘇国造の一族から出た模様で、阿蘇社神官の笠朝臣氏。②阿蘇郡小国郷より起る豪族葉室氏(後に、室氏という)は、初め笠氏を号したが、豊後清原氏の一族ともいう。③筑前国島郡に笠臣が見えるが、系譜不明であり、この族裔かもしれない笠氏が、大宰府官人や肥前国佐嘉郡にも見える。阿蘇神社の社家諸氏は、往古より「皆血脈ヲ以テ相続ス」(『神道大系、神社編五〇』一八二頁)というが、そのなかで阿蘇氏(宇治部宿禰)、草部氏(草部宿禰で、下田、草部)、山部氏(山宿禰で、宮川)と共に、阿蘇山上の社である天宮社の祝は「笠朝臣」を称した。平安後期頃から笠氏が天宮祝に任じ、重要神事には天宮祝が常に座の中央に着座する慣わしであった。天宮祝は今村を苗字としたが、その系譜を考えると、阿蘇国造一族から出た山部ノ阿御古が山部宿禰、後に山宿禰となり、そのなかから出て笠朝臣を称した模様である(阿蘇社の権擬大宮司にも今村氏があり、山宿禰を称した)。関連して言うと、早稲田大学を創立した大隈重信が出た大隈氏は、戦国時代末に筑後国大隈村(現福岡県久留米市梅満町)に住んで大隈を名乗り、後に肥前に移住して鍋島氏に仕えた。その先は笠氏とか葉室氏とか言い、豊後の清原氏の末裔と称し、また実系は菅原道真後裔ともいうが、これら系図は、世代数が多過ぎるなど内容に様々な混乱や不審点がある。従って、これら諸氏(上記を除く)は阿蘇国造の支族の流れという可能性もある。肥後南部におかれた葦分国造についても、「国造本紀」では「吉備津彦命の子、三井根子命」を以て国造に定めたとある。葦分は葦北とも書き、熊本県の水俣市・八代市・葦北域とした。この系譜も疑問が大きく、本来は吉備氏とは別系かとみられる。実際の系譜は難解であるが、阿蘇国造一族で笠朝臣を称した一派と関係したか。このほか、近江の琵琶湖東岸南部の栗太郡に「笠」にまつわる地名(草津市の南笠、上笠、下笠)が残る。下笠には「笠宿禰の本貫とされる西照寺跡」、南笠には「笠氏が建立歌」がある(ともに『滋賀県の地名』。これら地名の東方近隣、栗東市荒張にある胎内文書(『平安遺文』金石文編二六五)には、永治二年(一一四二)五月附で立氏二名、犬養氏、清原氏三名、物部氏などの名が見えるから、現実に笠氏が当地これら笠に関連する地名が美濃国多芸郡笠郷村(現岐阜県養老郡養老町の下笠・栗笠・船)にもつながりそうである。(宝賀寿男

(註4) 百済来地蔵堂 (くだらぎじぞうどう) =案内看板

葦北の国造阿利斯登の子・日羅は、百済にわたり 30 余年滞在し最高官の達率に昇進。572(敏達天皇元)年、百済から父へ地蔵菩薩像を送る。772(宝亀 3)年、日羅の墓に堂を建立し菩薩像を安置。中世には山門・仏殿なども構えた雲泉禅寺となる。堂の右手の高台にある当時鎮守の富士権現(村上神)、五輪塔群、1556(弘治 2)年銘の板碑に名残がある。大火後の 1604(慶長 9)年再建。1820(文政 3)年に改築。1911(明治 44)年に境内を拡張し堂を移転・修築。



参道の階段を上り右に 1816(文化 13)年銘の宝篋印陀羅尼塔、左に日羅公墓あり。さらに右段をり、1914(大正 3)年建築 1977(昭和 52)年改築の礼堂がある。切妻平屋根には反りがある。中央、向拝上に卍を描く。吹放しの中廊下左右に 8 畳間がある。地蔵堂は面が入母屋、背面が寄棟の妻入。1955(昭和 30)年に棧瓦屋根葺にする。向拝は中備に虎の彫刻、組物は連三斗、木鼻は獅子鼻・象鼻、海老虹梁を上下ではさむように手挟と持送りを大きく雲の刻とする。身舎は丸みのある亀腹状の石積み基壇に建ち、組物は大斗絵様肘木、正面小壁に「弘化二年」(1845)の落書きあり。内部は、外陣が畳敷き 10 畳で一間一花の格天井、内陣が上段で内外陣境に円柱が立つ。外陣と向拝に鰐口を吊る。

プロフィール

いしあい・ろくろう NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎 昭和 20 年 4 月、岡



山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年卒。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。